
ヤマメに魅せられて

槇原勇一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤマメに魅せられて

【Nコード】

N4546L

【作者名】

槇原勇一郎

【あらすじ】

札幌の大学で社会学を専攻する深介は将来のことを考えることに疲れ、久々に故郷を訪れる。久々の故郷でヤマメ釣りに興じていたが、宿泊しているペンションで一人の女性と出会い、次第に惹かれていく。

故郷

サラサラと静かな川のせせらぎだけが聞こえる。

六月も半ばだが北海道ではまだまだ暑すぎることはなく、心地よい初夏の風を感じることができる。

日光をキラキラと反射する水面を見据えながら、溪介は上流に向かって竿を振った。仕掛けの流れに沿って下流に向かって流しながら、蛍光色の目印を凝視する。

・・・来たっ！

半瞬の食わせのあと、竿を握る右手に僅かに力が加わえた次の瞬間、ビクビクと言う手応えが竿に伝わってきた。冷静にタイミングを合わせて、ごぼう抜きにする。

北海道でもこのあたりでは、あまり大きな溪流魚と言うのはいない。だから、溪介はタモも持つてきてはいない。やはり釣れたのは、二十センチ程度のヤマメであった。山女魚とも書くパーマークが美しい溪流魚だ。このあたりでは、「ヤマベ」と呼ぶこともある。本州では別の魚を意味するが、北海道には本州でいう「ヤマベ」は生息していない。「ヤマベ」と言えば「ヤマメ」のことだ。

すでに溪介のビクには、十匹程度のヤマメが入っていた。時刻はまだ十時ごろ。朝間詰めから始めた釣行だが、すでに、十メートルほど上流には滝があり、ヒットの確率は下がるが、あとは下りながら、

拾い釣りをして帰るしかない。渓流釣りでは、川下から川上に向けて移動しながら釣る。警戒心の高いヤマメを釣るためには、下流からポイントに近づく必要があるからだ。

渓流釣りは海釣りや湖沼での釣りのように、のんびりと座って行うものではない。ゴロゴロと岩の転がる渓流を登りながら、次々と仕掛けを投入するポイントを換えていく。上流から下流に向かって仕掛けを流し、糸が張ってこれ以上流れていかなくなるところまで行ったら、一度自ら上げて、再び上流から流す。同じポイントを狙うのはせいぜい数回程度。常に体と頭を使う釣りなのだ。

溪介は二十四歳になったばかり。札幌の大学で社会学を専攻する大学院生である。修士論文を書くための研究は順調に進んでいる。本の中でほとんど外にでない生活が数年つづいていたが、徐々に童心に返って故郷の川で渓流釣りと洒落込んでいたのである。

今は重大な決断を迫られていた。半年前に父親を事故でなくした。母はまだ高校生に病でやはり亡くなっている。親戚との折り合いも悪く、溪介は天涯孤独の身となってしまった。資産家であった父親の遺産があるので、学生生活にはそれほど支障はない。特に贅沢さえしなければ、食い扶持に困るようなことはないし、学費も無理なく支払える。

だが、社会学を専攻していても、それで就職すると言うことは難しい。博士課程に進んだとしても、その後大学で教鞭を取ることもできない限り、その後の生活の保障はない。文系の大学院では博士号を課程だけで博士号を取得できない。博士課程に進み、単位を取得しても博士号を得られずに満期退学になるまで、学生のままと言う者も多いのだ。満期退学後も研究生として研究室に残り続け、後輩の学生たちに煙たがられ続けるというのはあまりぞっとしない。

そんなことを悩んでいることに耐えられなくなったので、久々に研究の手を止めて、故郷に戻ってきたのである。故郷と言っても札幌から車で二、三時間程度の町だ。数年前に高校教師を定年退職した父が札幌で暮らしていたので、近くであるにも関わらず、少年時代を過ごした町を訪れる機会をずっと逸していたのだ。

「どうでした？お、なかなかじゃないですか！」

川を下り、泊まっているペンションに着くと、小太りの五十歳ぐらいの人の良さそうな男が話しかけてきた。このペンションのオーナーで溪介の親友であった同級生の父親である。親友自身は仕事の都合で今はアメリカで生活していた。息子が不在であっても、溪介を親切に迎え入れてくれている。

「お昼はテラスでバーベキューです。今日の釣果も塩焼きにして楽しみましょう」

溪介からビクを受け取ったオーナーは中身をのぞき込みながら、いかにも嬉しそうに話した。

「あ、ちょうどお昼からもう一組お客さんが来ます。うちは別々のお客さんでも一緒に食事したりしていただくので、まあ、気楽に接してみてください」

人見知りな溪介の性格もよく知っているオーナーは気遣わしげな表情をしていた。

「ああ、そうですね。じゃあ、そのお客さんたちにもヤマメをふるまっただけでいいですね」

「ま、と言ってもお一人のお客様なんですがね。女性お一人で」

「へえ、まあ、人の事は言えませんけど、変わってますね。この時期に」

ペンションはスキーのシーズンになれば混み始める。夏の間もアウトドアスポーツなどを目的に観光客が訪れることはあるが、それでも一人客というのは珍しいだろう。溪介の場合は釣りがしたいという明確な目的があっただが、女性一人と言うのはどういう旅行だろうか。

溪介は昼食までの時間を寝室で過ごすことにした。研究から離れていても読書の習慣だけは忘れられない。一日一冊の習慣はここ数年絶やすことなく続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4546/>

ヤマメに魅せられて

2010年10月11日00時06分発行